【郷土史への扉】

金を掘り川を掘る【其の2】

川筋直しの概要については、先月号でお話しました。では、どのような方法で川筋を変えたのか。今回はその工法について考えてみましょう。

工事の順序としては、新しい川にする溝をまず最初に掘る。次に元の川を締め切る。この方法が考えられます。その溝掘りですが、付近の農民を総動員して、川溝を掘らせたようなイメージが頭に浮びます。しかし、それだけではなかったようです。

以前から、「新川は井戸を掘って作ったげな」といわれていました。さりながら「井戸を掘ったとは、いけなこっけ」という疑問も消えず、具体的な様子もつかめませんでした。

最近「天降川の川筋直し研究会」の方々により、新しい資料が掘り起こされました。それは大分市宗方村に残された絵図の発見です。

絵図は江戸末の嘉永元年（一八四八）に、宗方村で行われた用水掘りの様子を描いたもので、地下へ縦に井戸を掘り、さらに横に穴を掘りつなぎ、水道を作っている様子が見事に描きとめられているのです。青竹の管を差しこんで空気穴を設けたり、松明を灯したりしている様子も見られます。これを見て、新川掘りの工法もある程度、具体性を帯びて理解できるようになりました。

川筋直し研究会の皆さんは、新川掘りの場合、横穴がある程度つながった時点で川水を注ぎこみ、土砂を押し流したのではと、推理を進めています。（詳しくは、『天降川の川筋直し』を読んでください）

昔の人たちも、頭を使ったのですね。

現在の地名からも川筋直しの歴史がうかがえます。野口橋下流には「東高岸・西高岸」の小字があり、ある程度自然の地形を利用した形跡もあります。またソニー付近に「小村土手」の名前が残っています。これは小村の人たちが築いた土手だそうです。隼人駅前に「土取窪」の小字がありますが、これも土手を築くため、土を取った跡に名付けられたものでしょう。

新川の川筋直しの費用には、横川の山ヶ野金山の金が使われたという記録があります（『殖産興業の先覚者，島津久通（徳源公）の事蹟』）。

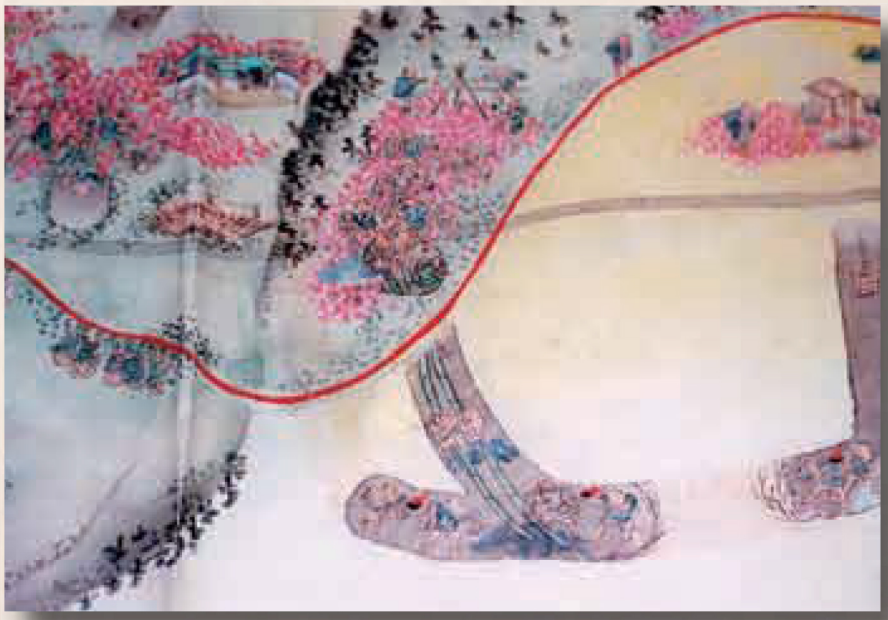
費用は金で137貫目余り。現在の額にして、いったいいくらに相当するのでしょうか。（ちなみに一貫目が3・75キログラムですので500キログラム以上になります。）

川筋直しと山ヶ野金山。この二つの接点を考えると島津久通が浮かび上がってきます。

久通は寛文年間まで、金山奉行を勤めたことが薩摩藩の記録にあります。新川掘りの責任者も久通でした。

こういうことを思えば、新川掘りの工事には、金鉱石を掘る技術が井戸堀や横穴堀に転用されるなど、さまざまな知恵・技術が用いられ、人のつながりがあったことがうかがわれて興味が尽きません。

文責＝藤



大分市宗方林所蔵：地下水道掘りの絵図